

『授業づくりネットワーク』1998年4月号

「総合的な学習の時間」の授業をどうつくるか

「提案型」で五感に訴える課題を探す

藤川大祐

1 注目すべき三つの点

教育課程審議会は、先頃発表された「教育課程の基準の改善の基本方向について」(中間まとめ)において、「総合的な学習の時間」(仮称)を設けることを提案している。このまま行けば、二〇〇三年度の学校五日制完全導入と同時に、小学校三年生から高校三年生までの各学年で、少なくとも毎週二時間、「総合的な学習の時間」が設けられる。「総合的な学習の時間」の授業をどうつくるのか、私たちにとって差し迫った課題となっている。

「総合的な学習の時間」では何をするのか。学校現場ではいくつかの教科にわたる合科的活動という程度に捉えられているようだが、教育課程審議会中間まとめは次のように言う。

学習活動については、例えば、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉などの横断的・総合的な課題などについて、地域や学校の実態に応じ、各学校が創意工夫を十分発揮して学習活動を展開するものとする。

このように、「総合的な学習の時間」で扱う例として挙げられているのは、国際理解、情報、環境、福祉といった現代的課題だ。単に合科的な活動をするのではなく、これまでの教科では扱いにくかった現代的課題を扱うことが求められているのである。

授業づくりという観点から見て、これら現代的課題を扱う際に注意すべき点は何か。私は、次の三点に注意すべきだと考える。

- <1> 直接経験が求められる
- <2> 価値判断に関わる
- <3> あらかじめ決まった「正解」はない

それぞれについて説明しよう。

<1>（直接経験）について。

実際に外国人とコミュニケーションすることなしに、国際理解について学んだと言えるだろうか。コンピュータを使うことなしに、情報について学んだと言えるだろうか。いずれも、答えは否であろう。環境や福祉の学習においても、リサイクルや介護に関わる実体験が重要な位置を占めるはずだ。もちろん直接経験だけでよいということにはならないが、直接経験させることなしに現代的課題の学習は成立しにくい。

（なお、情報に関しては、二〇〇三年までに全学校をインターネットに接続するという方針をすでに文部大臣が打ち出している。）

<2>（価値判断）について。

環境について学べば、豊かさと環境保護とのどちらを優先するかという問題に突き当たるだろう。福祉について学べば、よりよく生きるために何が重要かを考えさせられるだろう。国際理解や情報の学習においても、世界はどのように変化していくべきで、その中で自分はどう生きるのかという問題に子どもたちは直面させられるだろう。こうして、現代的課題の学習においては、価値判断に関わることが不可避となる。

<3>（「正解」はない）について。

2とも関わるが、現代的課題には絶対的な「正解」はありえない。環境問題や高齢化社会への対応について、私たちの社会はまだどうすることが正しいのかを決められずにいる。国際理解や情報化社会への対応においても、唯一の正しい結論などないのである。

2 陥りやすい二つのパターン

以上三つの点を意識して、どんな授業になってはまずいかをまず考えておこう。次の二つが陥りやすいパターンだと考えられる。

- A 結論押しつけ型
- B 課題なき調べ学習型

A (結論押しつけ型)は、「相手の文化を尊重しよう」「環境保護のためにリサイクルを進めよう」といった結論を、教師が子どもに押しつけるものだ。もちろん、多くの場合、あからさまに教師が結論を言うのではなく、巧みに誘導することになるだろう。

このようなパターンの授業には、二つの問題がある。

第一に、子どもたちが自分で判断することが難しくなる。教師の想定した結論のみが認められるということになるので、子どもたちは教師の意図の推測にエネルギーを使うようになる。

第二に、現代的課題の難しさを、子どもたちが理解しづらくなる。たとえば、「環境保護のためにリサイクルを進めよう」という結論が示されれば、リサイクルの限界やリサイクルによって生じる問題は子どもたちの視野から外れてしまう。

現代的課題には、あらかじめ決まった「正解」などない。私たちが今懸命に答えを探しているからこそ、「現代的課題」なのである。「結論押しつけ型」の授業で現代的課題を扱ってはならない。

B (課題なき調べ学習型)は、「高齢化社会について」「地球温暖化について」といった漠然としたテーマで子どもたちに調べ学習をさせ、調べた成果を発表させて終わるというものだ。子どもたちは、本を読んだり人に話を聞いたりして得た情報を、ひたすら列挙するという形で発表する。

このパターンの授業では、重要な事柄とそうでない事柄が区別されない。明確な課題がないのであるから、テーマに関わっていさえすればどれも等価ということになってしまう。このため、子どもたちが行うことは、見つけたことを次から次へと丸写しするという単純作業になる。このような単純作業は、価値判断を伴う現代的課題の学習にはそぐわない。

3 「提案型」の課題づくり

では、こうしたパターンに陥らないためには、どのように授業づくりを進めるべきだろうか。

「結論押しつけ型」の問題は、課題に対する絶対的な「正解」を安易に設定してしまうことであった。「課題なき調べ学習型」の問題は、そもそも課題がな

いことであった。ここから言えることは、どのような課題を設定するかが非常に重要であるということだ。

このときヒントになるのは、小西正雄氏が提唱する「提案する社会科」の考え方である。「提案する社会科」では、基本的に未来の問題を扱い、子どもたちに提案をさせ（あるいはいくつかの案から最良の案を選択させ）、互いの提案についての議論（「提案のみがきあい」）をさせる。未来の問題を扱うので、必然的に「正解」は存在しない。子どもたちは「正解」を気にせず、互いの価値判断を深めあうことができる。このような授業形態こそ、「総合的な学習の時間」にふさわしい。

たとえば、地球温暖化の問題を扱うとしよう。過去あるいは現在の問題を扱うとすれば、課題はたとえば「地球温暖化はどのように起こっているのか」となるだろう。これに対して、未来の問題を扱うとすれば、課題は「地球温暖化の問題を解決するにはどうすればよいか」となる。

課題をどちらにするかによって、子どもたちの活動は大きく異なってくる。

「地球温暖化はどのように起こっているのか」という課題の場合、子どもたちの活動は、地球温暖化について書かれた本を読んで議論を整理するだけになるだろう。もちろん地球温暖化の原因については対立があるだろうが、専門家どうしの対立について

子どもたちが判断を下すのは難しいはずだ。このため、子どもたちが行うのは、せいぜいさまざまな説を列挙する程度になる。これでは、「課題なき調べ学習型」と大して変わらないことになる。

他方、「地球温暖化の問題を解決するにはどうすればよいか」という課題の場合、子どもたちは、温暖化の原因について調べることはもちろんであるが、それに加えて、自分たちの生活のどこを変えるかという思考実験をすることになる。ある子どもは自分たちの生活水準を下げようとするかもしれないが、別の子どもは原子力発電に頼って生活水準を維持しようとするかもしれない。こうして対立する提案が出され、それぞれを比較検討する中で、子どもたちは問題の複雑さを知り、より深い価値判断を探るようになるだろう。

このように、「総合的な学習の時間」には、未来に関わる「提案型」の課題がふさわしいと考えられる。

4 子どもの五感に訴える

「地球温暖化の問題を解決するにはどうすればよいか」という課題は、中学生・高校生には取り組みがいのあるものだろう。しかし、この問題は大きすぎて、直接経験と関連づけにくく、小学生には扱いにくそうである。

特に小学校での実践を念頭に置くと、未来を扱うという条件に加えて、課題の具体性が求められる。課題の具体性とは、子どもの五感に訴えられるような課題を設定するということになるだろう。

西尾一氏の社会科の実践に、「とびっきりおいしいカレーライスを作ろう」という課題がある（『社会科発問づくりの上達法』明治図書）。この課題は、未来を扱うものであると同時に、子どもの味覚・嗅覚に見事に訴えるものである。西尾氏の授業の文脈とは異なってくる部分もあるが、「おいしいカレーライスをつくろう」という課題であれば、子どもたちは次のようにさまざまな活動を行うことができるだろう。

- ・カレーライスの材料や作り方を調べる
- ・コメやジャガイモ、ニンジン、肉といった個々の材料について、産地と産地ごとの特徴を調べる
- ・本場のインドやパキスタンなどの文化と、その中でのカレーの位置について調べる
- ・インドやパキスタンの音楽を聴いたり、民族衣装を見たりする。
- ・インドやパキスタンの人に話を聞く
- ・いくつかのカレー屋さんにカレーライスを食べに行く
- ・レトルトのカレーがどのようにできているのかを調べる
- ・実際に自分たちでカレーライスを作り、食べてみる
- ・保護者などを招待して、カレーライスを食べてもらう

重要なことは、こうしたさまざまな活動が、すべて「おいしいカレーライスをつくろう」という課題に向かっていることである。一つの課題に向かっているために、個々の活動において何が重要かを子どもたちは意識することができる。

同じような発想で、次のような課題を考えることができる。

- 「さん（外国の人）を呼んでパーティーをしよう（どんなパーティーにするか）」
- 「教室のゴミを減らすために何ができるか」
- 「お年寄りに喜んでもらえるような劇をしよう」
- 「インターネットで地域の紹介をしよう」

5 コンピュータやディベートの生かし方

「総合的な学習の時間」においては、もう一点、意識しておくべきことがある。教育課程審議会中間まとめは、次のように言う。(傍点引用者)

知識内容を教え込むのではなく、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方の習得を重視し、主体的な学習を推進するとともに、各教科、道徳、特別活動それぞれで身に付けられる知識や技能を児童生徒の中で総合化することをねらいとする。

ここで言われているように、「総合的な学習の時間」においては、「学び方やものの考え方の習得」が重視される。このことから、コンピュータの操作を学んだり、ディベートの手法を学んだりすることが重要となるだろう。

これまでも、学校にコンピュータが導入されていたし、ディベートの実践も広がりつつある。しかし、コンピュータやディベートのための時間が特別に用意されていたわけではないので、これらに取り組むには教科や学級活動などの時間をやりくりする必要があった。

しかし、コンピュータにしてもディベートにしても、子どもたちがある程度使いこなせるようになるまでには、それなりにまとまった時間を使う必要がある。そして、いったん習得してからも、繰り返し使わなければ意味がない。

今後、中学校技術・家庭科で「情報基礎」が必修になったり国語でディベートが重視されたりという動きはあるが、こうした教科の時間に加えて、「総合的な学習の時間」でコンピュータやディベートを扱うことができる。このことは、コンピュータやディベートの習得を促すとともに、コンピュータやディベートを生かした授業の可能性をもたらす。

コンピュータについては、ワープロや表計算に加えて、電子メールのやりとりやホームページの作成などを子どもたちが学ぶことになるだろう。すると、子どもたちは電子メールを使って情報収集をしたり、ホームページで成果を発表したりということができるようになる。音声を録音したり、デジタルカメラで写真を撮ったりということもできるだろうし、調査結果を表計算ソフトでグラフにするといったことも可能だ。

ディベートは、子どもたちの提案が具体化した段階で、その提案の是非を検討するために使うといいだろう。たとえば、地球温暖化の学習で、子どもたちから原子力発電推進という提案が出たときに、「日本は火力発電を原子力発電に切り替えるべきで

ある」というような論題でディベートをするのである。ディベートをすることによって、子どもたちの提案を両面から吟味することができるようになる。なお、ディベートの基本を学ぶには数時間の授業が必要であるが、そうした時間も「総合的な学習の時間」の中で確保しやすくなるだろう。

このように、「総合的な学習の時間」においては、コンピュータの操作やディベートの手法の習得をも重視し、子どもたちの課題追究に活用していくことが求められる。

金城学院大学